

財団法人 舞踊文化財団

Three decorative circular ornaments, each featuring a central burst of colorful threads (red, yellow, blue, and purple) radiating from a dark center. Below each ornament is a long, multi-colored tassel made of thin threads. The ornaments are arranged horizontally across the top of the page.

舞 踊 文 化
E. T. C

NO.14

目 次

舞踊の変身	学習院大学名誉教授	諏訪 春雄…… 2
自然人アイヌ こころの歌と踊り	アイヌ文化伝承者	四宅 豊次郎…… 3
中国民族舞踊と稲作文化（7） 三 稲作文化の中の民俗舞踊 1. 「稲が実るとタイ族の人々は狂喜する」と関門節の象脚鼓の響き	前雲南省舞蹈家協会常務副主席	劉 金吾…… 7
平成 17 年度黛民族舞踊文化財団活動予定		11

舞踊の変身

学習院大学名誉教授

諏訪 春雄

舞踊で、衣装、化粧、音楽などは変身の役割を果たす一種の装置である。

これらは、踊り手の役柄や感情を判断する手がかりになる。舞台上に出現した踊り手が、男なのか女なのか、若いのか年取っているのか、彼または彼女は何を考え、何をしていて、どのような状況におかれているのか。その判断に衣装以下の装置が大きく役立つ。

しかし、たいせつなことは、これらの装置が変身の結果の判断に役立つだけでなく、じつは変身をひきおこす起爆装置であることである。

衣装以下の装置が踊り手の変身をひきおこすことができるのは、これらが本来は神祭りの際にそこに神が宿る依代であったからである。

沖縄の神祭りでは、神に奉仕する神女のノロは、祭りに先立って山に入り、頭や身体にクバの葉を巻きつける。クバの葉はそこに神が宿る依代であり、ノロはこの葉を巻きつけることによって神に変身する。衣装や髪型はこのクバの葉と同じ働きをする。役柄が変わったから衣装や髪型が変わったのではなく、衣装や髪型が変わったから役柄が変わったのである。化粧と仮面は別のものではない。人間の顔の化粧や仮面に神がよりつく。そのときに踊り手は神となって、神のこトバを語り、所作を演じる。音楽も同じ働きをする。音楽は新しい役柄を荘厳するのではなく、音楽の中に役柄が出現する。東アジアの民俗芸能調査で、衣装や仮面、化粧、音楽のこのような機能を示す例に数多く出会った。中国の祭りでは仮面がよく登場する。初めに祭壇に仮面がすべて並べられ、神迎いの儀礼が行われる。仮面に神が乗りうつるのである。祭りを主宰する巫師たちは、祭りの進行中にこの仮面と衣装を信者たちの前で付け替える。それをきっかけに主役の神が交代し、儀礼の種類が変わる。

ベトナムの跳神とよばれる祭りでは、一人の女性シャーマンがあらかじめ神前にかさねて用意された幾通りもの衣装を信者の前で着替え、依りつく神の種類と性格を踊りと演技で表現する。それにつれて男性たちの演奏する音楽も多様に変化する。



図版 2

というよりも、音楽や衣装が変わるからシャーマンの演じる役柄が変化するといった方が当たっている。

現代の舞踊はもちろん神祭りとは異なる。しかし、すぐれた踊り手の身体がしばしば神に近付くことがあるのは、遠い日の神祭りの記憶がよみがえるのであろう。



図版 3

図版 1 (裏ページ)

図版 2

図版 3

顔面の化粧に神が宿る 中国の臉譜

祭壇に並べられた仮面と仮面を着けて神になった踊り手
中国貴州省トン族

神前で衣装を変えて神を演じる婦人 ベトナム跳神

＝自然人 アイヌ＝

こころの歌と踊り

アイヌ文化伝承者

四宅 豊次郎

第12回 まりも祭りとアイヌ

マリモは阿寒湖のシンボルであり、マリモの無い阿寒観光などとうてい考えられない。

古来から、アイヌはマリモに対して特別に愛護するという精神はなかった。だが、ここにきてアイヌもマリモのおかれている現状を考慮しなければならない事態になる。自分たちも観光阿寒の中で、木彫りの製作・販売をしてアイヌ舞踊を見せ、それで生計をたて暮らしているからだ。

マリモの返還運動は、新聞、ラジオ、それにテレビでも報道され、おかげで全国各地に散っていたマリモが次第に故郷に送り返されるようになってくる。

返還されてきたマリモを阿寒湖に戻すことになるのだが、地元有志が相談の結果「せっかくだから、単に湖に返すのではなく『まりも祭り』として感謝の祈りを込めた行事をおこなって、生息地へ返還しようではないか」ということで意見が一致した。

地元の和人有力者だけが裱(かみしも)を身に着けて参加して、神主に祝詞(のりと)をあげてもらっただけでは、何とも芸がなさすぎるし絵にもならない。

「それでは、原始から阿寒湖の主であるマリモは浮べられないだろう」と山本多助エカシ(長老)の発案により。アイヌの儀式をとり入れた祭りにすることになった。

「第1回まりも祭り」は、昭和25年10月7、8日の両日、幸い天候に恵まれ、阿寒湖周辺は美しい紅葉に彩られた中で行われたという。

司祭主は、地元の舌辛音作(したから おとさく)エカシで、当然だが山本多助は行事の指導的役割をはたし、隣村の屈斜路コタン(部落)からは山中西造エカシをはじめ、近郷の名のある長老や媼(うば)達もわざわざ足を運んでくれた。参加したウタリ(同族)は計20数名、マリモを育ててくれた阿寒の大自然の神々に対してカムイノミ(神への祈り)を捧げた。

この年に全国から返還されてきたマリモ48個をうやうやしく持ち、阿寒岳神社からポツケ(熱湯が沸きでる所)湖岸まで行進して、祭りのハイライトでは丸木舟で沖に漕ぎ出てマリモを母なる湖底に返した。

その頃の10月といえば、もう観光のオフシーズンであったが、当時の新聞は「阿寒湖に杖を引いた観光客はおよそ600名、各旅館とも夏の間でさえなかった超満員にうれしい悲鳴をあげ…」と報道し、マリモ愛護のため発足したこの祭りが思いがけぬ程の観光効果を生んだ。



まりも祭り 祭壇前(平成11年)
(中央 四宅 豊次郎)

「まりも祭り」は、その後も毎年一度も休むことなくつづけられ、平成16年度で55回の行事を行ったことになる。

昭和30年、マリモ返還運動により、全国から約3500個が返還され阿寒湖の生息地に入れたとある。(この年の数というのではなく、それまでの返還運動期間中の個数)

時はうつり昭和35年代を過ぎると、もう各地から返還されてくるマリモもなくなってきたので、返還運動は一応の使命を終えたことになる。

そこで阿寒観光協会では、せっかく全国的にも知れわたり、人気の高い祭りになったのであるから、秋の観光シーズンを少しでも長く伸ばすための行事にしたいという目的に方向転換した。

ウソとデタラメのまりも祭り

「まりも祭り」は、これまですんなりと世間の人々に歓迎されてきたわけではない。

昭和29年1月14日の北海道新聞に目をとおすと、次のように載っている。

太い見出しは＝アイヌとマリモの結びつけ＝実際には無関係「好ましからず」と識者の声。記事を要約すると、昭和25年、乱獲されるマリモの保護を目的として「まりも祭り」は発足したが、この際一種の儀式を図って観光協会、道教委釧路事務局では、熊祭りなどで有名なアイヌの儀式を採用した。

その際マリモを天気藻など神に結びつけ、アイヌをひっぱり出したことについて、当時でもアイヌ研究家は、文献、記録、伝説には何もアイヌとマリモを結びつける事実はないとして、マリモ祭りが定式化した場合の一般の受けとり方を心配していた。

佐藤釧路市図書館長は、「アイヌはマリモについて全く無関係で、マリモを神様扱いしたこともなく、「古俗の中にとけこんでいる事実もない」と研究者の立場から説を述べて、なおも「事実がなかったことを祭式その他によってあったかのように紹介しているのはよくないことだと思う。パンフレットその他にあるマリモとアイヌの関係が、その道に暗い人達の頭の中に入った場合、それが事実と受けとられ、一般に流布されることは好ましくない」といっている。

だが、道教委釧路局ではこの点について「事実は事実として尊んでゆきたい。しかしまりも祭りにアイヌが加わる仕方については改めるに当らない」と答えている。その後も、「まりも祭りはアイヌ本来の祭りではない」「ウソとデタラメの祭りである」という批判や論争が繰り返される中でまりも祭りは続けられてきた。

自称アイヌ研究家と名乗る人達は大勢いる。アイヌのユーカラ(叙事詩)や言語、地名、イオマンテ(熊送り)等の儀式や、生活習慣など各分野にわたって、それぞれの研究を論文や本にあらわして出版し、大学の教授や博物館長



カムイ ノミ (平成11年)

(左から)秋辺今、澤井進、床昭一、志富利一の各氏

などの名誉ある職についている人物もいる。しかしその中には、本当にアイヌ民族を理解して親身になって研究にあたっているのだろうか、と頭を傾げたくなる学者もいるのだ。エカシ(長老)やフチ(媼)から貴重な会話を何日も、あるいは何ヶ月もの間、聞きとり記録しても碌(ろく)に謝礼を支払わない。

エカシやフチは先人からの言い伝えを忠実に守り、誠に礼儀正しく優しい心の持主がおおいので、自分から見返りとして金銭などの要求はあまりしない。そういうアイヌ民族の謙虚なところを学者や研究家はたくみに利用する。



ポッケへの行進(昭和27年ごろ)
(左から)舌辛音作、中川亀蔵、小林鹿三、山本多助
山本太三郎、志富宗作の各氏

アイヌに関する各種の文献が世に出て、学者はその研究を評価され讃えられるが、それを伝承し、協力してくれた恩人(語り部)のことはあまり表面に出てこない。

アイヌ研究家は、古い時代のアイヌ文化については熱心に掘りおこし研究しているが、現在アイヌがおかれている立場、苦しみや悩みなどの問題点については、殆ど関心をもたないし相談にもものらない。真摯にアイヌを理解することなく、自分の地位、名誉、売名のためにだけアイヌを利用している学者や識者に対して、我々ウタリ(同族)は皮肉をこめて「アイヌ屋」と言っている。

まりも祭りやアイヌの関わりについても、アイヌ学者といわれている人々は、古来からない儀式であるから偽物だと決めつけるだけで、アイヌの真の考えや立場を理解する配慮がたりない。

祖先代々、いかなる作法や儀式においても厳しい原則、規律を守ってきたアイヌ民族が、

そう簡単に安易な気持でウソとデタラメな行事をおこなうはずがないのである。



阿寒湖と雌阿寒岳(昭和32年ごろ)

今回は、まりも祭りに、どの様にしてアイヌが加わったかについて書くことにします。

中国民族舞蹈と稲作文化（7）

前雲南省舞蹈家協会常務副主席

劉 金吾

三 稲作文化の中の民俗舞蹈

1. 「稲が実るとタイ族の人々は狂喜する」と関門節の象脚鼓の響き

歴史の記載するところによると、タイ族の先祖たちは二千年も前から農業生産に従事していた。タイ族は最も早く水稻栽培をしていた民族のひとつである。タイ族の居住していた場所はほとんどが亜熱帯か熱帯地方であり、土地は肥沃で、雨水を含んだ平地、河谷地帯であって稲作に適した自然条件を備えている。ただしその稲の高収穫はタイ族の人々の年間を通じての精魂をこめた辛苦と行き届いた耕作を抜きにして考えることはできない。タイ族は稲作の適地の選択、田のすき起し、水やり、まぐわを使つての土ならし、種まき、育苗、苗の間引き、田植え、雑草とり、排水整備、収穫、稲の積み上げ、脱穀、倉入れ等、どの一つの作業も手を抜くことはできない。特に炎天下という気候条件のもとでこのような労働に携わることがどんなに大変で高い代価を払うことになるのかはそれを経験した者でなければ想像もつかないであろう。筆者は1950年代に始めてタイ族の集落に入り、8ヵ月余り滞在して稲作生産の全過程を体験したが、すべての農作業に参加し、収穫を味わうまでの苦労は並大抵のものではなかった。集落から稲田までの小道には珍しい草や花が生えていて、木々が生い茂り、何種類かの小へびも出没する。「草むらをつついてへびを驚かす(ヤブへび)」のたとえのように、私たちは手に小さな棒を持ってへびを追いながら前進せざるを得なかった。道の脇の草むらの中にはかくれた無数のヒルがいて、筆者の足に食いついてくる。同僚たちは急いでヒルを下にひっぱろうとするが、ひっぱればひっぱるほどヒルはよけいしっかりと食いついてしまう。幸いにも後でタイ族の村に行き、そこで手のひらに唾をつけてその手でたたくとヒルはすぐに落ちてしまった。田植えのときの田の中ではもっと恐ろしい事態になる。無数の青緑色のぐにゃぐにゃした水ヒルが田の中を右往左往している。人々は田に入って田植えをしなければならぬのでヒルの害は防げないし防ぎようも無い。ある日の夜、同僚がわきの下にかゆみを感じた。手で搔いてみると血を吸って膨れ上がった一匹のヒルがひっかかった。秋の収穫の時期に人々



タイ族の関門節の象脚鼓の響き

は象脚鼓を打ちながら田に来て収穫をするが、稲の高さは人の身長より高く、よく実った稲穂は人の腰より低く垂れていて皆とても喜んだ。しかしそのすぐ後、焼けつくような日差しを浴びて筆者はめまいに襲われた。そしてめまいが収まった後、筆者は“谷子黄、傣家狂”の本当の意味を体得した。その後、筆者は『豊作を祝って』という群舞を創作したが、村にある大青樹の木の下での稽古のとき、踊り手たちは田を埋め尽くす黄金色の稲穂を見て舞踊監督の指示によるものでなく自然に湧き出た「ハオ リーリー、ハオ リーリー」(タイ族の言葉—「立派な稲だ、すばらしい稲だ」—訳注①)という言葉を叫び、「ヨー、ヨー」と言いながら激しく踊った。私たちは稲作労働のすべての過程には参加してはいないし、労働の果実を所有する立場にある者でもないが、豊作の喜びに熱狂的にすっぱりと浸りきることができた。タイ族の人々はなおさらそうであろう。彼等は一年中、朝から晩まで灼熱の太陽の下で苦心して耕作し、数多くの苦難を経てようやく収穫の季節を迎えることができたのだ。自分自身の労働の成果—金色に輝く粳(もみ)—を見て喜ばずにいられようか? 狂喜せずにはいられるだろうか?

いわゆる“谷子黄、傣家狂”(稲が実るとタイ族の人々は狂喜する)とは豊作の時期にタイ族の集落ですべての老若男女が三日三晩躍り明かすことを指す。その時の舞踊は“ガーコン(嘎光)”(タイ族の言葉—訳注②)と呼ばれ、直訳すると「跳鼓(太鼓の踊り)」、意識すると「太鼓の周囲に集まって踊る舞踊」となる。この舞踊の動作は単純で、全然難しくはない。それではなぜ三日三晩も踊るのか? もし“谷子黄、傣家狂”という体験がなければその理由はどうして理解できないであろう。

タイ族の暦で9月15日から12月15日まで(漢族の旧暦では6月から9月に相当する)はタイ族の“関門節”、“開門節”に当たる。タイ族の言葉では“ハオ ワ メン(関門節)”は雨季に入ることを意味し、“アオ ワ メン(開門節)”は雨季の終わりを意味する。関門節には一切の娯楽活動が停止される。というのは雨季が来ると春の農繁期のため精力を集中させる必要があるためである。それでも毎晩、村の大青樹の木の下には若者たちが集まり、象脚鼓の踊りに興じている。太鼓の音は夕風に乗って高床式の竹の家々に届き、いろいろのそばでタバコを吸っている老人たちや糸を紡いでいる女性たちが静かに耳を傾けている。「太鼓をひと打ちすれば米がたくさんとれる」と人々は言う。この太鼓の音はタイ族の人々の祝福と理想が凝縮されたものである。

訳注① ハオ リーリー: x a o³(穀物、稲、米) d i¹ d i¹(良い、good)

訳注② ガーコン: ga(輪舞) ko:ŋ(たいこ)

2. ペー族の田家楽

“田家楽”は大理ペー族自治州の稲作をしているすべての農村で行われている行事である。この劇は毎年旧暦5月の田植えが終わった後、農民たちが集まって自作自演する一種の野外舞踊劇であり、激しい田植えの労働の後の自分たちの娯楽となっている。ユーモアでおどけた表現形式でペー族の農耕労働と生活を再現している。その演技は総じて生き生きとして活発であり、役づくりは真に迫っていてしばしば人々の笑いを誘い、的確な表現でペー族の喜びを表現している。

田家楽の劇団は集落の“秧崇会”(稲の苗を尊ぶ会)という組織の中から生まれた。すべての演出プログラムの編成は秧崇会の責任で行われ、秧崇会はペー族地区の一種の伝統的な農業生産互助協力組織である。一般には春の大々的な田植えの時期に臨時の自由組合が結成され、秧崇会の責任者が農民たちの手で選ばれる。その人物は大抵は農業生産の名手で、田植え官とか、副田植え官などと呼ばれた。田植え官の主要な職務は田植え仕事から農業祭祀、田家楽の公演の組織等を全般的に上手に計画立案することである。田家楽の俳優たちには基本的には秧崇会の会員になった。田家楽の内容は水田耕作を中心としたもので、ペー族の水稲作物栽培の全過程を包摂しており、劇中では働き者と怠け者に対する巧みな人物評価、機知とユーモアに富む風刺が語られ、また農民の老夫婦が口のきけない息子と娘に農作業の知識を伝授する様子がおどけたしぐさで演じられたりするが、すなわち稲作知識の伝授と共に農民たちの楽しみがこの劇の目的となっているわけである。その他の小道具や衣装、化粧などはすべて芸術的な誇張として使用され、農耕の田野の雰囲気鮮明にもし出すと共にペー族の稲作文化の特色もまた強く表現されている。正副の田植え官は二つの麦の穂をつけひげにして、頭にはキジの尾付き(代わりに稲の苗でつくった)の武将の帽子をかぶり、長い服の上に短い上着という礼服のいでたちで、また後にはシュロ製の蓑をかぶり手にはシュロの葉の扇を持って登場する。正式な田植え官は栗毛色の馬に乗って、そして副田植え官は手に「五穀豊穰」「風調雨順(風雨が順調)」「六蓄興旺」「国泰民安」などと書かれた田植え旗を持って舞台に上がる。



ペー族の田植え

田家楽の登場人物には正副の田植え官、小役人、年配の漁師、木こりの男女、老農夫、その老妻(女装)、口のきけない男女、水牛と黄牛各一頭(人が頭に紙製の牛頭のをせ、体に毛布を巻く)、苗の選り分け人、田を耕す人、田の主、教師、学生、怠け者、桶やせいろの修繕親方、小間物売り、霸王鞭舞踊隊(男女若干名)。

田家楽は普通は田植えの終了後本村の広場で上演されるが、時により近隣の集落に呼ばれてそこで公演することもある。この劇はペー族の農耕生産活動の重要な内容の一つであり、毎年このように行われてきた。

田家楽は人々が自分たちの生活を舞台化したものであり、芸術的な誇張も行われた。ペー族の人々には特に彼らが好んだ冗談やユーモアの手法が用いられたので。田家楽はペー族の人々に大変喜ばれ、歓迎された。

3. 牟定三月会

楚雄彝族自治州の牟定県では毎年旧暦の3月28日から30日まで歌と踊りの集いが行われる。この集いは彝族の伝統的な祭日で、“三月会”と呼ばれる。

祭りの期間中、牟定県の県都の大通りや路地には盛装をして祭りに参加しようとする

人々で満ち溢れ、各職場や団体の大きな家の門戸は各地から来るイ族の同胞たちを歓迎するために広く開け放されていた。夜になると月琴の音が踊りの輪の中から聞こえてきて、手をつなぎ肩を寄せ合った無数の人々は大声で歌ったり、足を鳴らして踊ったりする。踊っている人々は男も女も老人も子供もいて、背中に熟睡している子供を負ぶって舞踊に参加した母親すら見受けられた。

伝説によると：はるか昔に牟定の盆地に深い淵がありそこに悪竜が住んでいた。毎年、田植えが済むと風浪が巻き起こり、淵の水は漲って作物を浸し、苗を押し流した。人々の恨みは骨髓に達した。ある年の旧暦3月28日、住民たちは互いに連絡を取り合って、悪竜が風浪を起したあの淵を埋めて平らにしようと老若男女が一斉に石や土を運び始めた。淵を埋めた後、人々はまだ地固めが完全でないことを恐れて、この場所で三弦を背負い三日三晩「左足舞」を踊り土を踏み固めた。この時以後、あの悪竜は二度と風浪を起こすことができなくなった。その後、毎年旧暦の3月28日から30日にかけて人々は牟定の盆地に集まって歌い踊り、改めて土や石を踏み固め、邪悪に打ち勝ったことを示した。それはやがてイ族の伝統的な祭日の三月会となっていくた。

牟定の三月会の伝説は、稲作の生産過程の中で人々はすでに自然力(竜)への全面的な依存から脱却し、ゆっくりと自然に打ち勝ち自然を改造していくたことを説明している。このような人間による自然の克服と改造は神話を構成する成分ではあるが、それはすなわち自然への神頼みからしだいに自分たち人間の能力に対する自信へ移行していくたことを意味するものであり、舞踊もまたそれまでの神に媚び、神を楽しませるものから邪悪を鎮める能力を持つものへとその役割を変化させていくた。

翻訳： 黛民族舞踊文化財団 藤原明人

参考文献

張公瑾『傣族文化研究』雲南民族出版社、1988年



(3頁.図版1 説明参照)

第10次雲南省舞蹈家協会訪日代表団来日訪日代表団交流会日程

2005年7月8日(木)～7月22日(月)

- 7月 9日(土) 東京都赤坂区民センター
- 7月10日(日) 横浜市教育文化ホール
- 7月11日(月) 東京都学習院百年記念会館
- 7月14日(木) 東京都日本橋劇場
- 7月16日(土) 群馬県太田市新田文化会館エアリスホール

舞踊文化E.T.C.は年二回発行予定 ※皆様からの投稿をお待ちします

舞踊文化E.T.C.No.14

発行人	犬丸 直	編集人	大野 晃
平成17年5月9日発行		財団法人	黛民族舞踊文化財団
港区赤坂3-10-3		電話	03-3583-3633
		FAX	03-3583-3637